

日本におけるアメリカ研究の欠落を補完する書
森本あんり著

アメリカ・キリスト教史



斎藤 眞

確かにアメリカでは、日曜日の朝、教会へ出かけ、礼拝を守り、献金する人は多い。聖書はどこまで読んでいるかは別としても、多くの人が聖書を所有している。そしてアメリカ国家も「神の下なる国家、Nation under God」とされる。大統領就任式では、新大統領はしかるべく由緒ある聖書に手をおいて宣誓する。アメリカはやはり「キリスト教国」なのだという思いがしてくる。にもかかわらず、著者によれば、日本のアメリカ研究は、アメリカ社会におけるキリスト教という主題を敬遠しており、本書はその「欠落を補完するために書かれたものである」ということである。

ただし、日本でも「アメリカと宗教」と言った研究がないわけではなく、書物も刊行されていた。たとえば宗教社会学の見地から、井門富二夫氏の編著『アメリカの宗教伝統と文化』があり、またアメリカのアイデンティティの研究のための手掛かりとして試みられた森孝一編『アメリカと宗教』がある。しかし、いずれも多くの寄稿者による論文集であり、必ずしも統一

性があるとはいえない。ことに歴史的展望をもつてする論文集ではない。そこで、アメリカ理解のためには、アメリカにおけるキリスト教の在り方の歴史を理解する必要があることを思い、その必要性を満たすべく書かれたのが、牧師であり、教授であり、在米経験の長い神学者森本あんり氏によるこの『アメリカ・キリスト教史』である。その背景には、著者の長年に及ぶ実際上の経験、学問上の研究成果が存在する。

歴史書として、本書もアメリカ大陸発見と開拓とがまずスペインによって行われ、「アメリカのキリスト教史は、かくしてプロテスタントではなくカトリックに始まる」と記す。やがて北大陸の南部ヴァージニアにイギリス人が出先基地としてジェームスタウンを築き、イギリス国教会が公定教会として設立される。また、北部ニューイングランド地帯で政治社会契約としてのメイフラワー契約によりプリマス植民地が形成され、さらに会衆派を公定教会とするマサチューセッツ植民地ができ、ピュリタン文化が育成される。他方、中部では、信教の自由を唱え

るクエーカー教徒などの植民地ペンシルヴェニアが設立される。

こうして、多様な教派が設立されつつ、一八世紀の前半に、教派の枠を超えた「大覚醒」と呼ばれる信仰復興運動が起こる。その代表的な一人が、教会中心の説教者であり、著述も多いジョンナサン・エドワーズであり、著者も『ジョンナサン・エドワーズ研究』という研究書を刊行されている。もう一人はイギリス人の巡回説教者ホイットフィールドで、各地を訪れ聴衆を感激させた。著者はこの大覚醒により、地域を超える一体感が起こり、「アメリカとしての自覚をもつにいたった」と指摘している。この指摘は重要で、本来別々の一三の植民地が、ともかく一体となって独立戦争を戦い、一つの連合国家として行動する基礎ができていたわけである。

ただし、単一の教派が全国的に多数を占めるのではなく、既成の長老派教会、会衆派教会などの他、ニューイングランドのロジャー・ウィリアムズから始まるバプティスト教会、南部で

英国教会から分離したメソジスト教会などが存在し、一九世紀に入ってから、神の三位一体を否定してイエスを一人の人間と見るユニテリアン教会が、ことにエマソンなど知識人の間で影響力を持つ。なお、カトリック信徒も少数ながら存続し、独立宣言の署名者の中にも一人いる。著者は黒人教会の存在、奴隷制と南北戦争についても論じ、さらに日本への伝道を含め、海外伝道のことにも記述している。

日本のアメリカ研究者としては、その専門分野が何であれ、本書を一読しアメリカにおけるキリスト教の流れを把握しておく、本書を座右に備え、時に応じ、必要に応じて参照し確認するのは最適な文献であろう。さらに、より詳しく調べる必要があれば、巻末の文献案内を適宜利用することができる。

(さいとう・まこと) 東京大学名誉教授・学士院会員
(四六判・一八三頁・定価一七八五円(5%税込)・新教出版社)

日本におけるアメリカ研究の欠落を補完する書
森本あんり著

アメリカ・キリスト教史



確かにアメリカでは、日曜日の朝、教会へ出かけ、礼拝を守り、献金する人は多い。聖書はどこまで読んでいるかは別としても、多くの人々が聖書を所有している。そしてアメリカ国家も「神の下なる国家、Nation Under God」とされる。大統領就任式では、新大統領はしかるべく由緒ある聖書に手をおいて宣誓する。アメリカはやはり「キリスト教国」なのだという思いがしてくる。にもかかわらず、著者によれば、日本のアメリカ研究は、アメリカ社会におけるキリスト教という主題を敬遠しており、本書はその「欠落を補完するために書かれたものである」ということである。

ただし、日本でも「アメリカと宗教」と言った研究がないわけではなく、書物も刊行されていた。たとえば宗教社会学の見地から、井門富三氏の編著『アメリカの宗教伝統と文化』があり、またアメリカのアインズワースの研究のための手掛かりとして試みられた森孝一編『アメリカと宗教』がある。しかし、いずれも多くの変稿者による論文集であり、必ずしも統一

クエーカー教徒などの植民地ペンシルヴェニアが設立される。こうして、多様な教派が設立されつつ、一八世紀の前半に、教派の枠を超えた「大覚醒」と呼ばれる信仰復興運動が起こる。その代表的な一人が、教会中心の説教者であり、著述も多いジョン・エドワーズであり、著者も『ジョン・エドワーズ研究』という研究書を刊行されている。もう一人はイギリス人の巡回説教者ホイットフィールドで、各地を訪れ聴衆を感激させた。著者はこの大覚醒により、地域を超え一体感が起こり、「アメリカとしての自覚をもつにいたった」と指摘している。この指摘は重要で、本来別々の二三の植民地が、ともかく一体となつて独立戦争を戦い、一つの連合国家として行動する基礎ができていたわけである。

ただし、単一の教派が全国的に多数を占めるのではなく、既成の長老派教会、会衆派教会などの他、ユニオンランドのロジャー・ウイリアムズから始まるバプティスト教会、南部で

性があるとはいえない。ことに歴史的展望をもつてする論文集ではない。そこで、アメリカ理解のためには、アメリカにおけるキリスト教の在り方の歴史を理解する必要があることを思い、その必要性を満たすべく書かれたのが、牧師であり、教授であり、在米経験の長い神学者森本あんり氏によるこの『アメリカ・キリスト教史』である。その背景には、著者の長年に及ぶ実際上の経験、学問上の研究の成果が存在する。

歴史書として、本書もアメリカ大陸発見と開拓とがまずスペインによって行われ、「アメリカのキリスト教史は、かくしてプロスタントではなくカトリックに始まる」と記す。やがて北大陸の南部ヴァージニアにイギリス人が出先基地としてジェンスタウンを築き、イギリス国教会が公定教会として設立される。また、北部ニวยอร์ก州で政治社会契約として「メイフラワー」契約によりヴァージニア植民地が形成され、さらに会衆派を公定教会とするマサチューセツ植民地ができ、ピエリタンの文化が育成される。他方、中部では、信教の自由を唱え

英国教会から分離したメソジスト教会などが存在し、一九世紀に入つてから、神の三位一体を否定してイエスを一人の人間と見るユニテリアン教会が、ことにエフアンジナルな間識人の間で影響力を持つ。なお、カトリック信徒も少数ながら存続し、独立宣言の署名者の中にも一人いる。著者は黒人教会の存在、奴隷制と南北戦争についても論じ、さらに日本への伝道を含め、海外伝道のことも記述している。

日本のアメリカ研究者としては、その専門分野が何であれ、本書を一読しアメリカにおけるキリスト教の流れを把握しておき、本書を座右に備え、時に応じ、必要に応じて参照し確認するのには最適な文献であろう。さらに、より詳しく調べる必要があるれば、巻末の文献案内を適宜利用することができ

（さとう・まこと 専攻学名 専攻教授・文学士院員）
（四六判・一八二頁・定価一七五円（税別）・新教出版社）

斎藤 眞